

三人の玄良と一人の虎章

——海軍大軍医奥山虎章

深瀬泰且

明治初年に海軍医官として活躍した大軍医奥山虎章は、弘化四年（一八四七）一二月四日に生まれた。父上山藩医奥山玄仲虎位はお玉ヶ池種痘所発起にあたって、その設立資金を拠出した一人であり、兄奥山玄省虎炳は旧幕時代には歩兵屯所附医師であり、のち明治新政府につかえて海軍大医監に昇進した。

奥山虎章は海軍出仕までは玄良を名のっており、その名の初出史料は横浜軍陣病院の日記である。慶応四年（一八六八）八月五日に横浜軍陣病院手伝に任命され、戊辰戦争による負傷兵をうけいれていたこの病院で治療にあたった。同年秋東京下谷に大病院が創立されるにもなつて、玄良は一〇月八日、患者とともに大病院に転勤した。このさいの辞令には病院医師試補手伝とともに、「通弁役」を申しつけられたとあり、十一月一〇日に病院医師試補に昇進した。通弁役を兼任したのは、玄良の英語の才能がぬきんでていたことの証左である。

明治三年（一八七〇）鹿児島医学学校の創立にあたって、ウィリアム・ウィリスをたずけて教員として生徒の指導にあたった石神良策らとともに、奥山玄良の名がみえる。この玄良は横浜軍陣病院以来のウィリスとの関係からみて、鹿児島医学

校創立時にウィリスとともに西下したものと思われる。鹿児島において医学校や病院の管理運営にあたった医師が、すべて薩摩藩関係者ではなく、藤田圭甫、三田村忠国、加賀美光賢などにその例がみられる。

虎章は明治四年（一八七二）七月二四日上京して海軍病院医官に就任し、以後累進して大軍医にすすみ、明治七年（一八七四）一二月一八日に海軍を退官した。明治二〇年（一八八七）四月一六日、四一歳で病没した。

奥山虎章の横浜軍陣病院勤務以前の医学伝習や、海軍退官後の消息についてはまったく不明である。

虎章の業績には『医語類聚』や『独和医学字典』編纂と、『講筵筆記』の翻訳（共訳）出版がある。

『医語類聚』はダングリソン Robley Dunglison（一七九八—一八六九）の *A New Dictionary on Medical Science and Literature* を底本とした英和医語辞典で、明治六年（一八七三）に出版された。本文二六八ページ、収録語数は六千語あまり、附録として「骨之表」「動脈分枝略表」などがあり、合計三二〇ページであった。ついで明治十一年（一八七八）に増訂第二版が出版され、本文三三三ページ、語数はおよそ七千五百語で、附録をあわせて四三三ページをかぞえるにいたった。およそ三五%増といえることができる。

明治初年のわが国の医学は、オランダ医学が退潮したあとをうけて主流は英米医学であり、ドイツ医学はむしろこれからという時期であった。そのような時代状況を考えると、英

米医学の教科書がかなり広範に利用されており、英和医語辞典としての『医語類聚』は、ダングリソンの原著以上にひろくむかえられていたにちがいない。

『講筵筆記』は海軍病院でおこなわれたエドウィン・ホイラー（一八四〇—一九二二）の解剖学講義を、奥山虎章と半井成質とが共訳した書物で、全四〇巻、明治四年九月に海軍病院官板として出版された。

奥山虎炳がその例言で

訳例専ラ先輩ヲ師効シ敢テ妄爲臆造セズ唯細微ノ部分未
タ先輩ノ訳ヲ経ザル者ニ至ラハ別ニ慎ンデ訳字ヲ創シ之
ニ填ツ然レドモ猶其ノ妥当ヲ欠者無キヲ得ズ看官之ヲ諒
セヨ

とのべているように、そのころ適切な訳語が存在しなかったために、翻訳にあたってはかなりの苦心があったものと思われる。この翻訳が奥山虎章をして、『医語類聚』を編纂させる契機になったのではないかと考えられる。

共訳者の半井成質はこの『講筵筆記』の翻訳刊行によって、明治七年一月に海軍軍医寮から賞賜をうけているので、奥山虎章も同様の賞賜をうけたものと思われる。

なお奥山虎炳は海軍病院において、ホイラーやウイリアム・アンダーソンの講義を、海軍生徒のために通訳しているとの記録があるので、海軍病院勤務であった虎章もおそらくその任にあたったであろう。（一九九五四年四月例会）

我国医学界初のX線実験 臨床講義者・丸茂文良

唐 沢 信 安

今年、レントゲン教授 (Wilhelm Conrad Röntgen) がX線を発見して百年目を迎えている。

その間、放射線医学は著しい発展をとげた。そこで初期の我国のX線の受容について述べてみたい。

明治二十八年（一八九五）十一月八日、ドイツ・ヴルツブルグ大学物理学教室でレントゲン教授がX線を発見した。更に十二月二十八日には、「放射線の新種について」と題して大学の物理医学会雑誌九号に発表した。

その半年後の明治二十九年五月三十日、丸茂文良は、私立医学校「済生学舎」の講堂で学生を集め、X線発生装置を作り、自分の懐中時計の鎖と、タバコ及び二銭銅貨をX線写真に撮影し、学生達にX線の特性について説明した（これが我国の医学者として初めてのX線発生実験の成功であった）。

当時、レントゲン教授のX線発見の報は、一月六日にロンドンから海底電信で全世界に報道された。しかし日本には伝わらなかった。

日本に情報が伝わったのは、汽船に資料が積載され、郵便により配達される迄に、二カ月を要した。第一報は二月二十日前後と推察される。